

ようろ い こう おおいや 溶炉遺構と覆屋

鋳型のほかには鋳造に関係した^{るつぼ}坩堝・^{はぐち}フイゴの羽口の類は見つかっていないが、^{おおいや}覆屋を付設した溶炉遺構を検出している。覆屋は、2間×3間（3.50m×4.00m）の規模を持つ方形の掘立柱建物で、柱の掘り方が15～20cm前後と小さく、簡単な構造であったと考えられる。覆屋の真中に設けられた溶炉遺構は、1.80m、縦1.25m、深さ0.35mを測る楕円形の土坑を^{くっさく}掘削した後、その底面に砂礫を含まない地山の土を叩きしめて、0.20mの厚さの平坦な基礎を造り、この上面を利用して炉が築かれていた。炉は土坑の端よりの位置に粘土をもって造られ、基底部のみが残っていたに過ぎないが、熱を受けて変色した範囲から縦・横50～60cmの規模であったと考えられる。このほか、濠や土坑から溶炉遺構に関連した^{ようへき}溶壁の破片や2次焼成を受けて変形した土器や器面が気泡化した土器が若干、淡赤色に変色する土器が割合多く見つかっている。溶壁片は高温で灰色に変色し、スサを混ぜた溶壁も見られ、壁面に若干のアールをもっている。

溶炉遺構の時期は、覆土ならびに溶炉遺構を切る土坑1570から出土した土器の形から前期前半、畿内（中）段階かその以前と考えられる。



溶炉遺構(上)・溶炉断面図(下)

熱変化した甕(上)・溶壁の破片(下)